

## 開かれた知の世界 — アジア史学会と北東アジア研究 —

豊田 有恒

2002年11月12、13の両日にわたって、アジア史学会の十一回研究大会が、本学講堂において開催され、成功裏に終了した。NHKニュースでも大々的に取り上げられ、島根県立大学の存在を全国レベルで知らしめたことは、大いに意義のあるイベントだったと信じている。

本学における大会開催にあたっては、横田禎昭教授を実行副委員長として、受け入れの準備が進められた。横田教授は、同会の初代会長であり、東京大学名誉教授である江上波夫氏とも、イラン発掘調査の折りから旧知の間柄で、これまで親しく同会の大会に参加してきたのである。

アジア史学会は、1988年、中国の研究者から、「古代アジア世界を中心にアジアの歴史と文化、およびその交流に関する諸問題の国際的・学際的研究を行なう学会を、国家・民族の枠を越えて設置しよう」という提案があり（アジア史学会会則にも反映）、京都大学教授（当時）上田正昭氏を中心として、その具体化につとめた結果、誕生した学会である。設立総会は、1990年3月16日、東京パレスホテルにおいて挙行され、翌日より二日間にわたって読売ホールにおいて、読売新聞社との共催のもと、第一回大会が開催されたのである。このような国籍を越えた研究機関は、これまで存在しなかった。まさに、東アジアの古代史研究に大きな足跡を残す第一歩であった。

発起人として、当時の多くの碩学の名が、記録されている。順不同に紹介するが、多士済々のメンバーで発足したわけである。

今回、本学を訪れた王仲殊〔ワンツォンス〕教授は、中華人民共和国（以後、中国と略す）中国社会科学院考古研究所所長（当時）であり、邪馬台国研究の中国側の第一人者として、しばしば日本を訪れ多くの講演会、シンポジウムにも参加しておられる。

中国側からは、王氏のほか、王健群、安志敏、馬得志、張声振など、中国社会科学院の研究者が、発起人に名を連ねておられる（敬称略）。

韓国側からは、金元龍〔キムウォンニョン〕ソウル大学校教授が、発起人筆頭に加わっておられた。同教授は、1975年、本学教授豊田とも、日韓共同プロジェクト「邪馬台国への道」（NHK、朝日新聞社共催）において、古代船「野性号」で玄界灘横断の航海に参加したこともあり、邪馬台国はもちろん、日本古代史にも精通した碩学である。

その他、今回の本学シンポジウムに参加された全榮来〔チョンヨンネー〕圓光大学教授をはじめ、韓炳三〔ハンビョンサム〕、金廷鶴〔キムジェハク〕、李基白〔イキベク〕、申敬徹〔シンギョンチョル〕などの方々が加わっておられる（敬称略）。

アメリカからは、李松来〔イソンネー〕ノースウエスト・クリスチャン・カレッジ副学

長および、今回浜田を訪れた李廷冕〔イジョンミョン〕ユタ大学教授などが、名を連ねておられる。

日本からは、初代会長に東京大学名誉教授江上波夫氏を選出した。多くの功績を上げた江上教授は、一般には、「騎馬民族征服王朝説」でつとに有名であり、私事ながら豊田が三十数年にわたって、私的に師事してきた碩学である。

最初、本会設立の中心となった上田正昭京都大学教授(当時)の研究室に事務局を置き、国内の多くの研究者への呼びかけによって、東アジア的な視点から古代史研究を志すメンバーを募ることとなった。日本側の発起人には、大塚初重、井上秀雄、佐伯有清、尾形勇、森浩一、金井塚良一、西谷正などの方々が参加された(敬称略)。

また、第一回の総会の席上において、時間的に呼びかけの間に合わなかった朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮と略す)の研究者にも参加を求めていくという決議がなされ、数年の後には実現の運びとなった。

以後、日中韓の三ヶ国において、いわば回り持ちで大会が行なわれ、活発な活動を行ない、多くの成果が得られた。だが、その間に、発起人、会員に名を連ねた多くの研究者が物故した。だが、アジア史学会は、これら先達の衣鉢をついで、順調に活動を続けて今日に至っている。

2001年3月、北京において、第十回大会が開催された。北京駅に近い中国社会科学院を会場として、活発な討論が行なわれた。日本からも、現会長の上田正昭名誉教授をはじめ多くの研究者が参加した。本学からは、豊田有恒、横田禎昭の両名が参席した。討論のあいまを縫って、繁華街である王府井〔ワンフーチン〕にある考古研究所を表敬訪問した。

横田教授は、講演において、仰韶〔ヤンシャオ〕文化の調査体験から、従来の唯物史観一辺倒の考えを改めるように提起し、中国側の主張する階級史観とまっこうから対立する主張を行ない、議論を呼んだ。会場の聴衆からの質問では、鋭く異議を唱える意見も出たが、のちに中国側の研究者からは、これまでのように一律に母系制社会という紋切り型の解釈ではなく、遺跡の個々の事例ごとに、検討を加えるべきであるという旨の賛意が表された。

北京大会の席上において、翌2002年の第十一回大会を、日本で開催できないかという打診があった。これには、韓国側の事情があったのである。2002年大会は、韓国で開催されることになっていた。だが、韓国側の中心メンバーである韓炳三〔ハンビョンサム〕ソウル国立博物館長が、急逝されるという不幸があり、計画が頓挫してしまったのである。その結果を受けて、上田会長より、島根県立大学で大会を開催できないかと、打診があったのである。

豊田、横田教授ともに、即答はできないし、できる立場にもないので、持ちかえって検討するむね約束し、北京より帰国の途についた。

なにぶんにも、開学より日も浅く、はたして、このような学会を引き受けられるかどうか不安があった。また、横田教授はともかく、豊田はアカデミズムの世界での体験が、本学を除いてはこれまでなく、こうしたイベントを挙行する能力に欠ける憾みがある。

本学に戻り、宇野学長や中島事務局次長などと相談し、前向きに引き受ける方向で検討に入った。本学は、総合政策学部という性格から、人文科学系の分野には、かならずしも多くの比重をさいていないが、多くの教員、事務職員から賛同と協力が得られる見通しが

たち、実現にむけて動きはじめた。

我が島根県立大学で開催される第十一次大会には、中国、韓国、北朝鮮、アメリカなどから研究者が、招かれることになり、さっそく群馬県高崎市にある事務局から、熊倉浩靖事務局長代行が、来浜して打ち合わせという運びとなった。

多くの手続き、準備などを経て、開催せまる 2002 年 11 月 11 日、ひとつの訃報が届けられた。アジア史学会の初代会長で、「騎馬民族征服説」で有名な東京大学名誉教授江上波夫氏が、96 歳の天寿を全うされたのである。豊田は、産経新聞に恩師の追悼文を寄稿した。

翌 12 日、大会が、始まった。

統一テーマに関しては、荒神谷遺跡の 358 本の銅剣、加茂岩倉遺跡における 39 個の銅鐸の発見など、青銅器王国として知られるようになった島根県の特徴を生かしたものにしようとの協議が続けられ、「環日本海文化の再発見～東アジア青銅器文化と古代出雲」という題に決定した。

また、この第十一次大会は、日本万国博覧会記念協会助成事業として行なわれ、アジア史学会を主催とし、島根県古代文化センターを共催とし、島根県立大学、浜田市、山陰放送、山陰中央新報社などを後援とし、市内の多くの法人、個人などから協賛として、支援を仰ぐことになった。

12 日 9 時 30 分、開会について、アジア史学会会長の上田正昭氏から、「北ツ海文化の再検討」と題して、歓迎講演が行なわれた。

現在、日韓のあいだで問題になっている「日本海」の呼称だが、明のイエズス会士マテオ・リッチが、1602 年「坤輿萬國全圖」において使用したものであるが、古代には、「日本書紀」や「出雲風土記」では、「北ツ海」と呼ばれていた。古代加羅国からの渡来人にまつわる北ツ海の記録が、「書紀」に載っている。三国志の魏書にも、東アジアの鉄、鏡、貨泉などに関係する記述がある。これらが、古代出雲と大きく関わっているのである。また、上田氏は、山陰という名称にも言及される。「書紀天武紀」に山陰を「ソトモノ道」と訓読している用例があり、それに基づくのだが、明治期になって「裏日本」という呼称が用いられるようになり、さらにマイナス・イメージが拡大したのだとする。そして、出雲大社の真御柱の発見など、山陰のイメージアップにつながる文化に触れて、講演を締めくくった。

続いて、明治大学名誉教授大塚初重氏が、「古代日本の馬文化—とくに東国の動向」と題して、講演された。

アジア史学会の初代会長江上波夫氏が、「騎馬民族征服説」を唱えたころ、日本では馬骨、馬具などの出土例は、それほど多くはなかった。そのため、この説には多くの疑義が投げかけられたのだが、甲府市の塩部遺跡、高崎市の長瀬西遺跡などでは、馬歯、馬具などが、発見されている。また、日本海側の長野県根塚遺跡では、伽耶（加羅）文化と思われる鉄刀などが、発掘されている。その他にも、数々の事例があり、馬、鉄器など、弥生末期の日本海側の伝播ルート、想定できる根拠となっているとする。

ついで、歓迎講演の終わりに、本学を代表して、横田教授が登壇した。「寧夏における北方系青銅器文化」という演題である。

中国中原の青銅器文化に遅れて、長城地帯の北方青銅器文化は、内蒙古オールドス地方の

青銅器、遼寧省一帯とも地続きであり、やがては朝鮮半島の青銅器文化とも繋がるのである。鍵をにぎる寧夏における最古の青銅器は、西周の時代のもので、様式的には陝西、甘肅などの出土品と類似している。「史記」には周の先祖が、戎狄のあいだに住んでいたとされているから、牧畜ないしは遊牧民と関わりがあったのであろう。寧夏南部の青銅器は、中原との様式的な関わりを示すが、春秋戦国時代になると、北方系の要素も増してくる。さらに、漢代になると、双方の要素が入り交じってくる。漢と匈奴の対決の歴史を反映するものであろう。

午前のプログラムの最後に、中国の王仲殊教授の記念講演が行なわれた。題して「燦爛たる出雲文化」。

陰暦十月は、日本では「神無月」だが、出雲地方に限っては「神有月」と呼ばれている。出雲といえば、中国の研究者も、風土記と大社を、真先に思い浮かべるほど、日本文化を代表する地域である。話題となった出雲大社の社殿については、もちろん中国でも注目されたが、中国との関係で言えば、神原〔かんばら〕古墳から発見された「景初三年」銘の銅鏡が、大きな意味を持っている。これまで、邪馬台国関連の機会に主張してきたことだが、この鏡は、中国江南の呉の工人が渡来して、日本で造ったものと考えられる。

神庭荒神谷遺跡の銅剣、加茂岩倉遺跡の銅鐸など、出雲のすばらしい青銅器文化に接した。銅剣は、中国の遼寧式、韓国の様式などと似ているが、日本では武器ではなく、祭器になっている。

王氏は、記念講演を、自ら作られた和歌で、締めくくった。

八雲立つ出雲の国は天霧りて、現と見えず八雲の住まい

昼食を兼ねて、アジア史学会の総会を開催し、翌2003年の会場などに関して、意見の交換が行なわれた。

午後の部では、より具体的な内容で講演が続けられた。

まず、中国社会科学員考古研究所教授の王巍〔ワンウェイ〕氏が、「出雲と東アジア青銅器」と題して講演した。

出雲地方における相次ぐ青銅器の大量出土は、日本ばかりでなく、国際的にも注目されているが、こうした文化も東アジア青銅器の流れのなかで位置づけるべきであろう。中国では、黄河流域の竜山時代後期(4500年から4000年前)の遺跡から、すでに純銅の鈴が発見されている。ご存じのように、鈴のような製品は、鑄造する際には、雄型と雌型という二重の鑄型が必要になる。これほど古い時期に、優れた技術が存在したのである。商(殷)代になると、青銅器は発達のパークを迎える。こうした技術は、中原から周辺の間わゆる「方国」へと拡散していく。BC9世紀、「遼寧式銅剣」が、現在の遼寧省で生み出される。この銅剣の様式は、その後の武器の歴史に重大な影響を及ぼすのである。また銅矛のほうも、中国では商代にすでに出現し、朝鮮半島を経由して日本へ伝えられたものと考えられるが、日本では「筑紫矛」と呼ばれる幅広の祭器になり、独自の発展を遂げていくことになる。

中国東北、朝鮮半島には、刃を研ぎだしてない青銅器が、しばしば発掘される。これらは、武器から祭器へ移行する、いわばミッシングリンクに相当する遺物ではないかと想像されるのである。また、出土状況に関しては、黄河流域ではなく、湖南省の埋納遺跡のほうも、出雲の青銅器と似ていると言えよう。いずれにしても、出雲地方が、東アジアにお

いて、重要な位置を占めていたことの証である。

プログラムには、ついで二人の朝鮮人研究者の発表が予定されていた。だが、開会の三日前になって、北朝鮮よりキャンセルの連絡があった。だが、研究者個人からは、丁寧なお詫びのファクスおよび、より詳しいレジメが送られてきた。そこで、お二人の意向を汲んで、事務局長代行の熊倉氏が代読するという決定になった。

朝鮮社会科学院歴史研究所院士、教授、博士の許宗浩〔ホジョンホ〕氏は、「朝鮮三国（高句麗、新羅、伽耶）と古代出雲の歴史的関係」と題する論文である。

美保湾の一带には、朝鮮との関わりを思わせる地名が、数多く残っている。韓山〔からやま〕は、のちに瓦山と転化するのだが、もともと高麗、加羅などの名が、訛ったものなのである。また、山陰特有の四隅突出型方墳は、高句麗の墳墓との共通性がある。美保湾付近だけでも、250基もの方墳が分布している。鉄刀、鉄鏃、馬鞍など、副葬品を見ても、高句麗との類似性が見いだせるのである。

美保神社の祭祀行列などの道具類にまで類似が及んでいる。太刀、四神鉾などにも、高句麗の古墳の副葬品を思わせる装飾がほどこされている。「出雲の狛（こま）」の名は、日本書紀などに現れるが、高句麗を指している。また、辰韓＝新羅と関連した地名は、国引き神話を筆頭に数多く見られ、韓竈〔からかま〕社、韓国伊太豆〔いたて〕神社など、神社名にも残されているのは、多くの朝鮮半島系の渡来人が、来住していたからなのだろう。

次に、朝鮮社会科学院歴史研究所室長、教授、博士の曹喜勝〔チョヒスン〕氏の「神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡出土青銅器の歴史的淵源」が、代読された。

1984年の358本の銅剣、1996年の39個の銅鐸の発見は、日本史を塗り替えるほどの衝撃を与え、一躍、神庭荒神谷、加茂岩倉の地名を東アジアの多くの研究者に印象づけた。

平壤〔ピョンヤン〕や徳川〔トクチョン〕において発見された琵琶形銅鉾は、銅、錫などの組成が、朝鮮独特のもので、日本のものと異なり、もともと武器である。このたび日本で発見された青銅器に関しては、鉛の放射性同位元素の割合が、朝鮮のものに符合することから、朝鮮の原料で造られた可能性が高い。だが、様式的には異なる点もあり、朝鮮型の鉾が、日本で進化したものと解することができよう。

また、日本の銅鐸の祖型と思われる銅鈴（小型銅鐸）は、平壤を中心としてたくさん発見されている。多くの場合、銅鈴と銅剣が、共に発見されているのは、日本における銅剣と銅鐸の同伴関係との符合を思わせる。

北朝鮮の日朝古代史学において、金錫亨〔キムソクヒョン〕氏の「初期朝日関係研究」（1966年）が有名である。同論文は、日本では「日本国内分国論」あるいは単に「分国論」と呼ばれている。古代日本に高句麗、新羅など朝鮮諸国のコロニーが存在したとする説である。金錫亨氏の「分国論」は、いわば北朝鮮の公式見解として、扱われているようである。代読されたレジメも、この「分国論」に則ったものと考えられる。

続いて、文献史学の立場から、韓国精神文化研究院韓国大学院名誉教授の姜仁求〔カンイング〕氏から、「斯盧国〔サログク〕と倭国交流の一形態、昔脱解〔ソクタルヘ〕の出自と関連して」と題して発表が行なわれた。

韓国の史書「三国史記〔サムグクサギ〕」「三国遺事〔サムグンニユサ〕」などには、多くの始祖伝説が記されている。特に新羅では、朴〔パク〕、昔〔ソク〕、金〔キム〕の天降三姓から、まわりもちで王を出したことが、ひろく知られている。朴氏の始祖赫居世〔ヒヤッ

コセ)、金氏の始祖金闕智〔キムアッチ〕などについては、民俗学的にも神話学的にも、くわしく説明されているが、昔氏の始祖昔脱解に関しては、不可解な謎が残る。倭国の東北千五百里の多婆那〔タバナ〕国で生まれたとされるのである。この点に関しては、これまでも日韓双方の研究者の諸説がある。倭国を北九州ととれば、多婆那国は、丹波あたりに比定すべきだとする説もある。姜教授は、種々の文献を上げて、この多婆那国が、古代島根に比定されるべきだと主張する。考古学の知見を借りて、四隅突出型方墳、青銅器などの伝播、分布ルートなどを辿れば、古代における日韓の交流史が、おのずから分明になってくるのである。

姜教授の後をうけて、韓西古代学研究所所長の全榮来〔チョンヨンネー〕氏の「青銅器時代の韓半島と日本」という講演が始まった。

韓半島の青銅器文化には、ふたつの流れがある。北方系の琵琶形銅剣、そして中国系の桃氏剣の二つである。これら遺物の流入の過程では、それを模した磨製石剣も造られた。石剣の発達には、おおよそ四期が想定されるのだが、のちの百済の故地となる扶余松菊里〔ソンクンニ〕の石棺墓では、第三期の石剣とともに琵琶形銅剣が発見されている。この銅剣は、遼寧地方のものではなく、韓国南部海岸に分布する後代の形式だが、この時点では日本では見られない。石剣の分布は、日本では稲作の萌芽期と重なるのだが、佐賀県の菜畑遺跡の縄文晩期から出土する断片が最初であろう。日本でも、銅剣の分布は、磨製石剣について起こっている。

その他の銅製品、たとえば銅鐸などは、韓国では錦江〔クムガン〕流域の遺跡から発見されるのだが、多紐鏡、銅剣、半環状飾り玉が、セットになって出土しているケースがあり、奇しくも日本神話の「三種の神器」を連想させるものとして注目を集めたものである。

また剣の把頭飾も、銅剣とともに発生している。日本の吉野ケ里遺跡で発見されたものと似たガラス玉で有名になった茶戸里〔タホリ〕遺跡では、このほか把頭飾なども見つかり、玄界灘をはさんだ日韓の文化の共通性を示すものとされている。

第一日めの締めくくりは、趣向を変えて、ユタ大学教授の李廷冕〔イジョンミョン〕氏による「東アジアの岩刻画」という講演であった。

ネイティブ・アメリカンの岩絵から始まり、スライドを使った講演は、シベリアから中国、韓国へと岩絵の系譜を追い、日本各地の岩刻画に言及し、さらに北海道の謎のフゴッペ洞窟の絵文字(?)までも紹介され、聴衆のイマジネーションをかき立てた。

初日のプログラムは、石見神楽の上演ののち、ウェルカム・パーティーに移行して終了した。

第二日めは、沖縄学研究所所長の外間守善氏からの「海を渡って来たアラ神の素性」と題する講演で幕を切っておとされた。

アジア史学会の第九回大会は、二年前に沖縄で催行された。その際、歴史学、民俗学などを踏まえた大きな成果もたらされた。外間教授の講演は、沖縄各地に流布されているアラ神信仰を、日本各地のそれと比較論攷するという民俗学的な研究である。

これまで定説とは言わないまでも、アラ神、あるいはアラを冠する地名などは、とかく韓半島の安羅〔アラ〕地方と関係づけて片づけられてきたきらいがある。だが、沖縄には、アラ御嶽〔うたき〕、アラノ浜、アラサケ御嶽など、多くのアラ地名が残されている。また、伊勢にも、荒祭宮、荒島など、アラ地名が存在する。殯〔もがり〕を意味するアラキ、

アラ笛、アラ弓などの用例では、荒々しいの意味ではなく、聖なるものという意味をなしている。

アラ地名の分布は、四国、九州、本州にも数限りなくある。特に出雲地方は、荒神〔こうじん〕信仰なども、アラ神の系譜を引くものであろう。平田市のアラ神は、海神でありながら、稲作との関わりを示す稲（藁の場合もある）蛇の習俗を伴っている。日本文化の基層（substratum）の部分で、沖縄のそれとも通底しているにちがいない。

ついで、鳥根県を代表して、日本の青銅器、鉄器に関して、鳥根県古代文化センターの研究者から、報告講演が行なわれた。

1984年から翌年にかけて、斐川町の神庭荒神谷遺跡から、358本の銅剣と6個の銅鐸と16本の銅矛が発見され、日本中にセンセーションを巻き起こした。これまで、銅剣銅矛文化圏として、教科書では北九州文化圏を想定していた。つまり、この大発見によって、学会のパラダイムが崩壊したのである。また、1996年には、加茂町の加茂岩倉遺跡から、39個の銅鐸が発見された。これまでの教科書的な知見では、畿内大和を銅鐸文化圏と定義していたのである。まさに、20世紀の最後の四半世紀、日本の考古学会には、出雲という妖怪が徘徊することになったのである。

遠来の各国研究者に対して、鳥根県を代表して、日本の金属器文化について、現場での経験などを踏まえて、発表を行なう必要があると考え、本大会の共催団体である鳥根県古代文化センターから、二人の研究者を招いて、講演してもらった次第である。

最初は、松本岩雄氏から「東アジアのなかの弥生青銅器文化 — 荒神谷・加茂岩倉・田和山遺跡の事例から — 」と題して、総括していただいた。

日本に青銅器がもたらされたのは、弥生時代前期後半と考えられている。中国では、すでに殷周時代から青銅器が用いられ、多岐にわたって分化していったのだが、日本の特徴は、その種類がきわめて限定されている点にある。

おおよそ剣、矛、戈、銅鐸の四種につきるのだが、これらの分布の時期を三期に分けて研究している。第・期は、主として北九州における墳墓副葬の例である。第・期では、墳墓副葬が減少し、埋納遺跡が増加してくる。第・期には、山陰、瀬戸内では、青銅器は使用されなくなる。

こうした青銅器の原料は、どこから運ばれてきたのであろうか？ 青銅には、銅のほか、鉛、錫などが含まれている。この内、鉛には、三種類の同位体がある。これら同位体の組成を分析すれば、産地が同定できるのである。荒神谷の青銅器に関しては、すでに分析結果が出ている。銅剣は、1本が朝鮮半島、343本が華北、14本が両者が混合したものという結果である。銅矛は、4本が朝鮮半島、10本が華北、2本が混合、銅鐸は5個が朝鮮半島、1個が華北と判明している。これに対して、自然銅を原料として、鉛、砒素など添加物として加えたとする説もある。

加茂岩倉の出土状況でも判るように、弥生後期になると、出雲においては、青銅器が山奥に埋納されるケースが増えてくる。弥生社会に、なんらかの変革が起こった証拠であろう。傍証として、松江市の田和山遺跡を考えると、狭隘な山頂部に、9本柱の神殿と思われる遺構が発見されている。また、壕と土塁で、その山頂部を守っているようにも解釈できる。しかも集落、倉庫などと思われる建物は、この域内にはなく、田和山を仰ぎみる周辺の欠田、門田などの遺跡に存在する。田和山を祭る社会構造の変化があったのであ

ろう。

続いて同じく古代文化センターの丹羽野裕氏から、「弥生時代山陰の鉄器研究の現状について」と題して講演していただいた。

近年、弥生時代の鉄器研究は、おおきく進歩している。特に、弥生人の脳で有名になった鳥取県青谷上寺地遺跡などから、大量の鉄器が出土するにおよんで、これまでの知見が、がらりと入れ代わったのである。山陰地方において、鉄器が使用されるようになったのは、現在のところ弥生中期以降と考えられている。鑄造鉄斧が再利用されるなど、当時、いかに鉄が貴重品であったかを、物語っている。中期から後期にかけては、ヤリガンナ、刀子、鑿、鎌など、小型の鉄製品ばかりであったが、3世紀以降になると、鋤のような大型のものも使われるようになった。

鳥根、鳥取の山陰地方にまたがって、鉄に関しても、共通する特徴が見られる。漁具に使われている例では、鹿島町、邑智町、木次町などから、ヤスが出土している。漁労を営んでいた山陰の特徴である。また、北陸にいたる地域では、おおきな刀剣類が、多く発見されている。また、北九州あるいは、その向こうにある朝鮮半島との様式的な近縁性も見いだせるが、あるいは、山陰の鉄器文化は、北九州を経由することなく、ダイレクトに朝鮮半島からもたらされたものと解することもできよう。

午前の講演をもって、プログラムを終えて、午後はシンポジウム形式の討論に移った。上田正昭会長を座長として、大塚初重、王仲殊の両氏を副座長として、講演の出席者全員をパネリストとして、質疑応答を行なった。前日の講演に関する部分に関しても、活発な議論が展開された。

地元紙ばかりでなく、全国紙の取材もあった。また、二日目の朝、NHKの全国ニュースで報道されたため、そのビデオを講演会に先立って聴衆に披露し、おおいなる喝采をほくした。得るもの大であった二日間である。

(TOYOTA Aritsune)